

猪犬と登る猪猟の頂点へ

猪猟の上級編

⑩

田宮治

頂点に立つ

いよいよ目指すところは最終目的の頂点である。山彦会千葉支部に突き付けられた現実、猪猟の極致にあって、ますます困難を極めていく。この難所を一気に突破して頂点に立つためには、千葉支部で二秋をかけて鍛え上げた「最高の大技・小技」や、得意にしてきた「猪猟の極意」を総集集して乗り越える以外にないのである。私は機が熟したことを感じ、独自に苦労して編み出した極意の中から、最も得意としている「戻りタツ」の原理を応用した二、三人でやる改良猪猟法をもって、今日の一戦に出たのである。

私が独断でこの難所に懸けて、絶対に登り詰めようとしているの

が、梯子となる大事な一戦である。だから、この戦いには間違っても完敗してはならない。

そんな大事な戦いなのだが、今日の戦力は支部長の北嶋氏と新人の坂東氏だけである。年の瀬での忙しい時期だから仕方ないが……。

犬群はヨシ号、マロ号、シロ号であり、この子たちの実力をもってすれば、どんな戦いでも思いのままに敢行できるはずである。これまでタツで撃ち獲るのは逃げ一手の小物の場合だけである。

今日の計画は、必ず猪が寝ていると思う大峰を三人でどん詰まりまで攻めるだけの単純なものである。その中味は何百戦も猛猪と戦って学んだ、とっておきのグル猪対策である。

犬たちを放すわずかな時間に、

その戦法をしつかりと指示する。

「いいか、今日の猪は必ずお前たちの所を突き切ろうとぶっ飛んで来るから、焦らず落ちついて十分引き寄せてから撃つのだぞ！」と、撃つ時の注意点だけを重点的に話す。

「さあ、行くぞ！」と、大峰の峰筋にある細い道に乗り、ここからが要所と思う一番高い頂上まで来た所で三人は小峰を下りて行く。真竹の大藪が左側に広がっており沢下まで五〇〇メートルの所に猪道がある。

「北嶋さん、ほらこの間、説明した猪の戻り逃げたあの場所だよ。北嶋氏は「分かった。あそこに誰が張るのか？」と、今日こそは、の決意が十分に伝わってくる強い声で問い返してきた。

「そうさなあ……二人一緒にい

いよ」と答えたが、すぐに「坂東氏を少し下に置き、あんたが上から彼をガードしてくれ」と、小聲で付け加えた。

この大峰は、ここからしばらく平らだが、少し下りながらグルッと回っている県道まで真っすぐ続いており、その一五〇〇メートルの間には右側に下る小峰が四本あるが、ほとんどが下の田んぼ荒らしが広がる所まで下りていて、その間に小沢を挟んでいる。

今日の改良猪猟法は、大峰筋を狩り進む私が二本目の小峰にさしかかった時、二人で張っている戻りタツを移動して二本目の小峰にタツを張り、三本目まで順次移動してタツを張る「戻りタツ」と「移動タツ」を合わせたものである。

この山の下半分は篠竹と真竹の

大藪になっていて、上半分は急な崖に雑木の大林が程良く続いている。猪にとつてはこの上ない住み処になっている。

今日は、これから始まる激戦の嵐が全く嘘のように風もなく静かな絶好の猟日和で、大峰筋の小道はまるでハイキング道のようにである。その辺には見事な檜の大木や椎の大木がある。時折、麓の家で飼われている犬たちの声がかすかに聞こえる程度で、県道を走る車の音も気になるほどではない。木の葉が落ちた頂上からは絶景であり、私たちの現在の心中を覗き見ているかのように、まるで美しい箱庭のようだ。

「よし行くぞ」と、タツの合図とともに犬たちにも活を入れ、無線で決意を伝える。「返事はいいから、これからはすべて俺が連絡するからじっと動かず待つように……」と指示を出す。左側を狩り込まないよう大峰からはわざと二〇〇くらい下り、犬群の狩る威力を今日の作戦成功につなげるために大峰の右側を傾注して狩り始めた。

絶妙な間

犬群はすぐに猪臭を感じしたようだ。指示どおり大峰の下二〇〇くらいにある猪道に乗り、小気味よく上下を狩り進んでいる。「よしこれでいい。すぐ出るぞ」とひと安心した私が、元の大峰筋に戻り、小道をゆっくり五〇〇くらい歩き出した時、ヨシ号とマロ号が猪の発見の射竦めの吠え声を上げた。ウウワンワン、ワンワンの見事な声である。

ちなみに、射竦めは寄せ鳴きと同じようなものだが、猪の発見で鳴く第一声であるこの技こそ、猪止め犬としての命であり、主人が教えることのできない天性の猟能なのである。この一瞬に繰り出す犬たちの威嚇は、どんな大猪でも犬の実力を肌で感じて動けなくしてしまう大切な技なのである。この時間が少しでも長いと、猪は走っても逃げ切れないことを知り、またすぐに止めらるることで、害にこそなれ(他犬や家畜に)、何の

役にも立たない。

一流芸とは、「逃げる」と咬むぞ！」と猪を睨みつけて間を置いて吠え付くという駆け引きであり、猪が絶対に逃げられない絶妙な間の取り方なのである。この止め芸がなければ、どんなに多くの猪を狩る犬であっても、ただの追い犬であり、猪止めの犬ではない。

「それ行け！」と、犬たちを送り出してまだ五分ぐらいだというのに、シロ号まで元気で吠え付いたように、静かだった山肌が急にせわしく動き出した。「よし起きたぞ。タツ注意！必ず行くぞ」と言い終わらないうちにヨシ号が突っ込んでいった。

そこはタツの目の前に広がる真竹の大藪の斜め上で、直線で七〇〇くらい先の所なので、生声でも犬たちの様子は十分にタツの二人にも伝わっているはずである。私には逸る気持ちをぐっと抑えて銃を握りしめ、飛び出す時を見計らっていた。

ヨシ号の咬み込みで、猪はすぐ前にある小峰を越えて逃げに出

た。ギャンギギッと、犬たちがグレ猪を急追し、後ろ足にチョンガケ(逃げる猪の後ろ足に素早く咬み込み、行き足を止める一芸)をしていくように、グオーググッと、猪も反撃しながら小峰に登るのを諦めて真下に広がる真竹の大藪へ逃げ込もうとしている。

真竹藪で猪が逃げ一手の場合は断然有利であり、犬たちに喧嘩でも仕掛けてこない限りまず止まることはない。ワンワン、ギャンギヤンの追い鳴きと、猪のバリバリと竹をへし折る必死の逃げが一団となってタツに向かっている。

「しめたぞ！これが本当の戻りタツだ」と思い、大峰筋から覗き込むように眼下の山稜を眺めてドキドキしていると、何と猪はタツの遙か手前で「の」の字を描くように急旋回して、私の立っている大峰を指してどんどん近づいて来る。

「しまった！猪はあんなに離れた所からタツの動きと臭いを感じたのだ。恐ろしいまでの手慣れた逃走術だ」と感心しながら、「よし、今度は俺の番だ」と登って



千葉ではこの真竹の大藪の中に入ったら動けないほどだ。ここに寄り付く難しさ、暗くで見えない猪になるべく寄らないことには、猪の動きが機敏で、犬を撃たないためにも近射よりほかにない

来る猪を待ち構えていると、大竹藪を出て山肌が急斜面になった辺りで犬たちに追いつかれた猪は、横這いで私の三〇〇くらい下を通り抜けて行った。

犬たちは元氣そのもので、ワンワン、ギャンギャンの連続鳴き

で、上にいる私に気づき訴えているようだ。「よしよし、その調子だ。頑張れ、あとひと息だぞ」と大声を掛けてやりたかったが、そこはぐっと飲み込み、今一番知ってもらいたかった戻りタツに連絡

した。

「一番です。とれますか、どうぞ」。元氣よく北嶋氏から「はい二番です、どうぞ」。私は手短に「十番だけタツに残して、二番は私を追って大峰筋を県道方向に来てくれ。犬たちがきっちり猪を付けているので、必ず右側の谷で止めるから大峰を走って右下の犬たちの止め鳴きを確認して寄り付いてくれ」と告げる、猪が越えようとした小峰に向かってぶっ飛んで行った。

少し下り坂の笹の小道を三〇〇くらい走った所から右に下りている一本目の小峰が今越えた所だが、犬たちの声はもう一本先の小峰のようだ。「何くそ、負けてたまるか。俺が必ず決めてやる」と、さらに突っ走り、二本目の小峰が右に落ちる所を通り過ぎ、三本目に差しかかる中間の大峰下の五〇〇くらい所で、犬たちの元氣な絡み鳴きが聞こえてきた。

「二番さん、とれますか？」と現在地を聞くと、北嶋氏は大峰筋から一本目の小峰を少し下り犬たちと猪を必死で追って、二本目の小峰の手前で大藪につかまり悪戦苦

闘の最中である。俺の後を追って大峰を走ってれば待つてやれるのだが、とてもそんな時間はない。

「犬たちが猪に絡んでいるのは目の前の小峰を越えた所だよ。俺は三本目の小峰を飛び下り猪の行く手を切ってしまうから、犬たちの鳴き声に注意しながら二本目の小峰辺りで勝負をかけてくれ」と告げたが、もどかしいほど先を急いでいた。

咬み止め現場では犬たちを守るため、一秒を争う寄り付きが何よりも大切である。そのことを証明するかのよう、犬たちの鳴き声有一段と大きく轟きわたり、猪への射撃めが完了して、凄じ咬み止め鳴きになっている。

「よしよし、とうとう止めたぞ！」と、大きく先回りして犬たちの鳴き声を右の沢下に聞きながら、三本目の小峰伝いを飛び下りた。犬たちの止め鳴きは咬み鳴きの連続になっていて、静かな谷間からわき上がってくる恐ろしいまでの迫力である。ワンワン、ギャンギャン、グオーグオーと、団



水のない滝壺の中での激戦。こうなったらどの猪も動けない。刺し止め撃ちで、一発で決めるより手がない



マロ号、シロ号、一番奥がヨシ号。一直線の谷落としてのすえに谷底の滝壺に必ず猪を嵌め込むのが常である

子になって二本目と三本目にある小沢の藪中を一直線の谷落としてある。

山が割れるような咬み合いの轟音がどんどん下まで落ちて行き、とうとう一番下の一面が篠竹藪の広がる小沢で止め切られて激戦となった。「よしきた、待っていろよ」と、ころげるように小峰伝いに走り、犬たちのいるすぐ上の小峰に立った。

一瞬で撃ち、一発で倒す

立ったりしゃがんだりしながら犬たちの咬み止め現場を確認すると、小沢のどん詰りではなく、その向こう側に広がる篠藪のようだ。目標をきっちり定め犬声で「ほら頑張れ、ジジが来たぞ!」マロ、シロ、ヨシ、頑張れ!」と思いきり怒鳴った。

この合図は犬たちを元気づけるのと、すぐ近くまで来ている北嶋氏に私が現場に突進するぞと知らせるためである。そして呼吸を整え、これから始まる止め撃ちに全力で当たるための銃を確認し、左

腕でしっかりと握り、急斜面を飛び下りた。

谷底での犬たちは一方的に猪を押しまくっており、一カ所にとどまって動かない。ここからは静かに、できる限り急がなければならぬ。ゆっくりと一歩、また一歩と、ツルや木の根に掴まって慎重に下りて行く。

ところが、ここからが一番大事だという急斜面で、手に持っていた草根が抜けズルズルと右手を山肌についたまま三びくらの谷底まで滑り落ちてしまった。谷底は二びくらの滝壺だったが、幸い水はほとんどなく、立ったまままで着地できた。

耳をつんざくような犬たちの鳴き声に思わず振り返ると、すぐ右後ろに犬たちと猪が泥まみれで大乱闘を繰り広げていた。今私が滑り落ちた所から三、四びくらの岩肌が水で大きく削られ抉り取られた滝壺の真上で、すぐにでも犬と猪が飛び込んで来られる最悪の場所である。

ヨシ号とマロ号は猪の両耳に食い下がり、シロ号は後ろ足に深く

咬み込んでおり、猪を力で振じ伏せている。今だノと思ひ、咄嗟に一躍くらの岩段を駆け登り、犬たちを交わして銃を猪の肩口に突き刺すように一撃を入れた。ズンノと谷間に轟音が鳴り響き、猪はその場に崩れ落ちた。

「よしよし、よくやった。マロ、ヨシ、シロ」と、何度も褒めちぎるが、銃声も私の声もおかまいなしに咬み、口を離さず咬みまくり、完勝に酔い浸っているようだ。この一瞬が犬たちを大きく成長させる大事なことであり、猪の肉などどうでもいから犬たちのやりたようにさせておくのが常である。

私は猪獵人であれば全く同じだと思っている、今日の作戦（戻りタツ）を立案したのである。そして、グレ猪との激戦を思いどおりの完勝で飾り、その戦いの中で待つべき時と攻めきる技、つまり難問の寄り切り方や刺し止め撃ちをどうしても会得してもらいたかったのである。

犬たちの見事な止め芸を目の当たりにして、「一番です。良いメス

猪が獲れたぞ！」と全員に知らせると、谷上の小峰辺りで北嶋氏から元氣な返事がある。北嶋氏は既に止め現場を感知して必死の寄り付きを敢行していたようだ。できることならば彼に撃たせてやりたかったと思った。

そんなことを考えながら、頃合を見計らってヨシ号、マロ号、シロ号の順に「よくやった。上出来、上出来」と、泥だらけの全身を撫で回しながら、ケガがないか確認し、滝の上に広がる篠竹原の平らな空き地に引き綱で繋いだ。

そして、ご褒美にジャム入りのコッペパンを半分ずつ与えた。私はいつも犬たちの引き綱やパンなど、山でいざという時に必要になるものは必ず持って来ており、車に戻る二度手間を省いている。犬たちを撫でながらしばらく待っている、北嶋氏が向かい側の小峰の上に現れて大声で怒鳴っている。「ここだよ」と現場を知らせ、私が飛び下りた同じ滝壺に下り立った。そこに横たわる猪を見てびびくりしている。

「ここから撃ったの？」と空ケ

ースを拾い上げながら聞いてきた。

「そうだよ、ちょうどその場に滑り落ちて、犬たちを見て、さすがその段に上がり、突き撃ちしたのだよ」と、照れ笑いで答えたが、正直なところ犬たちの完成芸に助けられたようなものである。

岩棚で反響した犬たちの鳴き声で、止め現場はすぐ前に広がる篠竹藪と勘違いして何の疑いもなく沢を下り、そこから本番の寄り付きだと思っていたことを十分に分かるように説明してやった。「恐ろしいようなあ、ここからでは猪が突いて飛び下りて来たらどうにもならないね」と言うので、「すべての止め現場は同じようなものだよ。どんな時でも一瞬で撃ち、必ず一発で猪を倒すのが、止め猪獵の最も大切なことだよ」と、恐れず、慌てず、確実に決めることを改めてその場で説明した。

「北嶋さん、今度はあんたがやる番だぞ！必ずその場を俺が作るから……」と、また大笑いである。

見事な連続鳴き

それにしても一流犬群による猪止め猟は、終わってみればわずか三十分での名勝負であった。この梯子となった激戦は、私の立案どおりに夢の頂点をぐっと手繰り寄せる夢舞台となった。

犬たちの見事な働きは、すべて打ち合わせて分かっていたように、予想地点できっちり猪を起し射竦めで始まり、素晴らしい寄せ鳴きから急追の追い鳴きで、「戻りタツ」の寸前まで追い込んでいった。

タツを感知したグレ猪にUターンされるがすぐに追い付き、小峰を越えて逃げ切ろうとする猪にチヨンガケをして、小峰筋から大峰を目指した途中でついに猪の行き足を止め、猛烈な全犬の絡みで一直線の谷落とした。

凄まじい迫力で団子になって小谷を落ち続け、山が割れるくらいの連続鳴きで、ついに谷底のほとんど水のない滝壺に猪を嵌め込み、私に刺し止め撃ちで決めさせ



ロープで引き出せば、「こんな思い出」も残しておける。ジジたちで130 kgの猪が簡単に獲れるのは、まさに犬たちのお陰である

たのである。

この完璧な夢舞台の主役は当然、犬たちで、猪止めの要点を随所できっちり決めてくれた。さらに、完成された追いと攻め技の素晴らしさを倍加させたのが、犬芸で一番大切な、起こしてから撃ち獲るまで、決して途切れることなく鳴き続けて知らせる連続鳴きである。

猪犬の超一流芸とは、まさに連続鳴きの止め猪猟であり、猪猟人は何の迷いもなく確実に止め現場に突っ走れるのである。

この愛犬たちの鳴き声は、主人に送ってくれる七色の言葉であり、「起きた。走ったぞ」から「猪が大物である」「小物である」や、さらに「突いて来たぞ」「止めに持ち込んだよ」まで、すべてが愛犬

たちの鳴き声で判別できるものなのである。

猪猟人としては、愛犬の実力がこれくらいまで登り詰めた時点で本当の楽しさや醍醐味を味わえるものだ、と、しみじみ思った一戦である。私はこんな極致の激戦に完勝しながら、三頭のどの子もかすり傷一つしない見事な敢闘に満足して至福感に浸っていた。

犬たちのそばに腰を落とし、流れ出る汗をタオルでぬぐいながら、「マロ、ヨシ、シロ。お前たちは凄い。よくやってくれたなあ……」と、何度も何度も泥まみれの体を撫で直し、顔の泥をふきとってやり、また「ありがとう」と言う。犬たちも目を細め「ジジ、分かったよ」と安心して腹這いになっていった。

何でもないようなことだが、激戦を完勝で飾った時には、このように犬たちの働きを最大限に褒めちぎり、好物（私はジャム入りのコッペパン）を少しでいいから与えて撫で回してやることである。この繰り返しで、犬芸は限りなく高まり名犬に登り詰めていくので

計画どおりの完勝

ところで、猪を獲った後には地獄の引き出し作業がある。新人の坂東氏と三人では心もとないの、相談役の平野氏に応援を頼んだ。今日はまだ日が高く、あと一戦くらいは十分できそうだったが、私はこの大事な一戦を分かりやすいかたちで総括しておきたいとの思いがあったので、早めに切り上げることにした。

私は「戻りタツ」をもって、梯子の一戦と位置づけたからには、何がなんでもあの時点であのタツに猪を追い込んでやり、ドンピシヤのタイミングで二人に撃ち獲ってもらいたかったのである。教えている私にとっては、それが目指していた本当の目的である。

心の奥では素人なのだから、「動くなよ。話をするな」と言ってみたところで、猪猟で初めて張った「一番タツ」なのだからしよせん無理なことである。当然、あの猪はあのタツ場が逃げ道であり、

犬たちが猪に急追していたのだから、あのタツに嵌まらないわけがない。

だからといって、分かりきった原因をゴチャゴチャ説明したところでは仕方がない。そんなことよりも今日の「戻りタツ」の本当の意義である。

一見、誰の目にも猪に気付かれ戻られた大失敗のタツではあるのだが、私が考えた「戻りタツ」と「移動タツ」の本当の意味するのは、猪がここを突き抜け戻るところで、逃げ切られないようにがちり守ることだったのである。

つまり、猪に気付かれ戻られた失敗は、犬たちと私の狩り進む方向に猪を追い返し、猪を戦いの圈内に置くことで止め猪狩の成功を助けたのである。だからこそ、三人の中で大切な二人を小峰に立たせ、絶対にこの峰を突き抜けられないようにしたのである。

ちなみに計画では、猪が一本目の小峰までいなければ、このタツを移動して一本目の小峰に並んで二人を「戻りタツ」にする。さらに二本目の小峰までに猪が起き

なければ、二本目の小峰にまた移動してタツを張るといった具合に、起きたこの猪に戻る癖があるのを察知して、絶対に戻らせず猪を戦いの圏内に置くのが狙いの「変化タツ」だったのである。それでも立場上、タツで二人に撃ち獲ってもらいたかったのはいうまでもない。

まだまだ日も高く、あと一戦行い、タツの基本を説明した上で、「木化け」「石化け」の体験をしてみたら、今度は見事に二人が撃てたかもしれない。それよりも、猪にあの距離で感づかれUターンされたタツの失敗や心得を、猪が獲れて気分が乗っているちょうど良いこの機会に説明し教えるのが一番良いと思ったのだ。だから午後からの一戦は取りやめて、平野氏に応援を頼み、猪の引き出し作業となったのである。

地獄の引き出し作業も今回は四人だったので、笑いながら楽しみな道端の小川に難なく到着した。新人の坂東氏には、わずか八〇+のメスだったのだが、つまり

いたり転んだり大変だったよう

必死だった。

その場で腸抜きをして、今日の一戦についてお互い本音を吐いて、また大笑いである。

犬たちだけでなく、猪狩人もこんな楽しい戦いを積み重ねていくことが、何より大事な成長に繋がるのである。壮大な夢舞台でも、今日の一戦のように計画どおりに見事達成できるのである。

さらに忘れてならない大切なことは、激戦して全力で頑張ったが猪に逃げられたというのでは、猪の経過が良かったというだけで、その目的である猪が獲れなかったのだから、完勝とか達成ではない。

すべての点で本当に良かったと勝利を喜び、猟人の心につまでも残る思い出の名勝負は、やはり計画どおりに戦って一撃で猪を獲らないことには成立しないのである。

そんな考えで、私はあと一戦して学ぶより、この激戦で猪が獲れた喜びに浸っているうちに、素直な目で見返して正直な心に問いかけながら、「あの時はこうしな

れば駄目だ」「このような場合は、こうしのでこう攻めるのがベストである」といったことを、獲れたメスを食べながらワイワイガヤガヤと、雑談の中で諦めくくるのが一番良い道案内だと思っ

ても、みんなの気を引き締めるために、「タツで猪に気付かれるようではまだまだだぞ」と、心で完勝と分かっているながらも、奮起を促して次なる鎖の一戦に心残りを作ってやることで、残念さを打ち破る勇気を植えつけたのである。

「北嶋さん、この次の戦いではあなたが必ず猪に寄り付き、五くらいいからで止め撃ちをやってみるからな……」と檄を飛ばす。

あとはワイワイガヤガヤで、思いの勝ち戦の話に花が咲く。私は心より納得しニヤニヤ笑いがらまたビールをおおる。この年で猪と真っ向勝負できる幸せをしみみ感じていた。

今回は「鎖の一戦」です。

(つづく)